

Domestic Invited Lecture

英語学習における「接地」と「前接地」—モダリティ・文化的認知・自動化をめぐる視点から—

“Grounding” and “Pre-Grounding” in English Language Learning: Perspectives on Modality, Cultural Cognition, and Automatization

Komiya, Tomiko (Okazaki Women's U.)

本講演では、言語学習における「接地（grounding）」と「創造的自動化（creative automatization）」の關係に注目し、特に日本人英語学習者が英語モダリティの習得において感じる困難さの背景を探る。言語が意味をもつためには、運動・感覚的経験、他者との相互作用、文化的・社会的文脈といった複数層にわたる「接地」が必要である。この点は、今井・秋田（2023）の接地理論、Barsalou（2008）の接地認知、Harnad（1990）の記号接地問題など、先行研究においても広く議論されている。本講演では、それらの理論を参照しつつ、講演者自身の仮説として、「接地」が〈感覚運動接地〉〈情緒モダリティ接地〉〈深部感覚接地〉という三層から成るという説を、根拠事例とともに提示する。第一層は身体運動や五感的知覚、第二層は主観性や待遇意識に関わるモダリティ、第三層は内臓感覚や深層的文化的認知など、無意識的で暗黙的な感覚と結びつく層である。英語学習者はしばしば第一層の接地にとどまり、第二層の情緒モダリティ接地に苦勞する傾向がある。本講演では、こうした状態を「前接地（pre-grounding）」と位置づけ、英語教育においてこの段階をいかに超えていくかが鍵であることを論じる。また、接地を促す環境的条件として「他者の眼差し（gaze）」の役割が重要であると考え、ヴィゴツキー（1934）の社会的相互作用の理論や、Tomasello（1999）の共同注意（joint attention）の研究は、言語発達における他者の存在の意義を裏づけている。さらにメルロ＝ポンティ（1945）は『知覚の現象学』において、知覚そのものが常に「他者性」に開かれていることを示唆した。これらの先行研究を踏まえつつ、接地と眼差しの關係についても考察する。さらに、英語学習者が第二層での接地に困難さを抱え、しばしば「前接地」にとどまるのに対し、内臓感覚をもたない AI の言語生成は本質的に「疑似接地（pseudo-grounding）」にとどまり、（おそらく）第三層には至らない点についても触れる。



Tomiko Komiya, M.A. in English Literature, is a Professor Emerita of Okazaki Women's University. Representing the JACET Chubu Chapter as chapter chair she was a member of the JACET board of directors from 2010 to 2012.